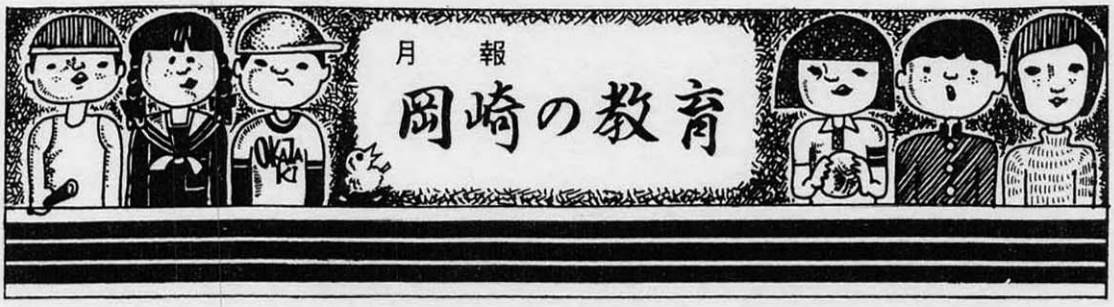


10月号

色づき始めた稲穂の中
自転車の長い列
朝の空気は頬にやさしい
「おはよう」
「おはよう」
あいさつの声が大きな輪となって広がる
心地よい一体感
さわやかな朝
今日もがんばろう

一日の終り
眼前に続くうろこ雲
高い空
今日一日の満足をペダルにこめて、一こぎ一こぎの感触を確かめる
「さよなら」
「さよなら」

どこまでも続く一本の道

昭和56年10月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

（学び舎へ急ぐ銀輪部隊―六ツ美中）

—教育随想—

うるさいなあ

外山　滋比古

この夏は、わけがあって、毎日のように、近所の区立図書館へ通って仕事をしている。

一般閲覧室で午前二時間、午後二時間くらい書きものをする。調べることがあれば、すぐ開架式の書庫へ入って行かれて、たいへん都合がいい。

こんないい仕事場はないと喜んでいるが、ひとつ気になることがある。しゃべる人がいるのだ。冷房の音はじゃまにならないのに、人の声はうるさい。それもかなり大きな声で話す、しゃべっているのは例外なく女の子。

遠くでしゃべっているのを、立って行って叱るわけにもいかないから、また育ちの悪いのがいるなとニガニガしく思って、こらえる。今日はすぐ近くの机にいる二人連れの女子高校生がしゃべり出した。考えがまとまらない。

「しずかにしなさい。」

と思い切って注意すると、こちらを向いている方の女の子が、ピョコンと頭を下げた。〝すみません〟というつもりなのだろう。かわいいんだな、案外、と思って、かの女たちの無作法を心の中で許してやることにした。

女子大学に勤めて十三年になるが、いちばんいやなのは授業中に、私語する学生がいること。昨年は家政学部の新入生のクラスを受けもった。入学早々は神妙だったがそのうちにしゃべり出した。注意する。また、しゃべる。こういうことが続いた。ある日、とうとうかんしゃくを起した。勝手にしろ。

「このクラスの授業はもうしない。」

と宣告して引き揚げた。何時間かして、クラス代表という学生が二人、わび状をもってきた。ふたたびこういうことはしませんというしおらしい誓いが、クラス決議として書いてある。それなら教えてやろうと機嫌をなおした。

これはずっと前のこと。こどもがまだ小学生のとき、PTA参観日で授業を見せてもらった。おどろいたのは、母親たちがくだらぬことをしゃべっている。にらみつけてやっても、いっこうに反応しない。腹が立った。

そのころ書いていた新聞のコラムに、こんな母親には授業を見る資格なし、と書いた。

すると、方々から反論のはがきが舞い込んだ。みんな母親である。知らない女ばかりだが、自分のことを悪く言われたと思い込んでエライ権幕である。「ただのおしゃべりをしているのではない。疑問があるから話し合っているのであって、うるさいなどと言うのは、昔の考え。教育はにぎやかに、たのしく勉強するのが現代的である。」とかなんとか書いてある。アホくさい。どこでそんな〝現代〟教育学を吹きこまれてきたのか。バカは死ななきゃ、なおらない。おしゃべりも死ななきゃ、なおらない。

小学校の授業を見ながら母親たちが話し合っていたのは、

「奥さま○○デパートのセールへいらしゃいまして？」

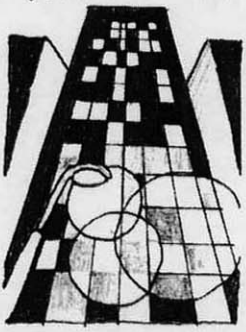
「いいえ。いいかしら、あれ。」

「すごいんですってよ。」

と言ったきわめて教育的なことだった。

（お茶水女子大学教授）

海外こぼれ話



イタリアの写真屋

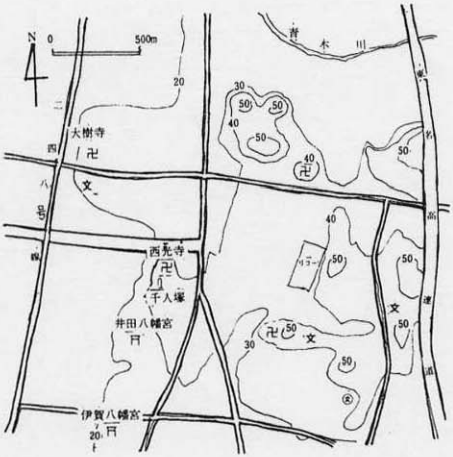
横井　吉明

イタリア第二の大都市ミラノで、ドウオモ（ゴシック風の大寺院）を見学したときのことである。

この豪華な建物を背景に、鳩の群れに囲まれて、家内と記念撮影をしようとしていると、イタリア人の写真屋が近づいてきた。言葉は通じないが、身ぶり手ぶりから察すると、「餌を買わなければ、ここで写真をとってはいけない。」ということらしい。仕方なく、餌を一握り買った。

慣れた鳩は、餌を持つ手の上や肩に止まる。当の写真屋は、カメラを構えて二度シャッターを切った。それから地下室の薄暗い事務所に連れて行かれた。写真を送るから宛先を書けと言われ、写真代と郵送料で四十ドル請求された。外に出てから、これは悪質な写真屋にひかかってしまったかなと後悔したが、旅をするうちにいつしか忘れていた。

帰国後、もしやと思って写真を待ってみたものの待てど暮らせど音さたはなか



—ふるさとの山河—

井田野

伊賀八幡宮を左に見て北へ進むと、バス通りは緩やかな上り坂になる。北部商店街の中心的役割を誇るごとく、岡信井田支店の建物と現在建設中のあおいマート新館の赤い鉄骨が目に入ってくる。五さ路には車がひっきりなしに往来し、更に進むと、六車線の都市計画道路が西に広く開けている。

この幅広い道路の南の丘に登ると、西光寺がある。本堂左側には大衆塚と呼ばれるこんもりとした木立ちがある。家康が桶狭間の戦で大樹寺に逃げこんだ際に戦って倒れた寺僧を葬ったもので、この塚の上には市指定文化財の阿弥陀如来石像が座している。境内南端から五十メートルほど小径を歩くと、千人塚という首塚が住宅にはさまれて現れる。直径五メートル、高さ五十センチメートルの小塚の上には、大小十基ほどの碑があり、折からほおづきも飾られていた。

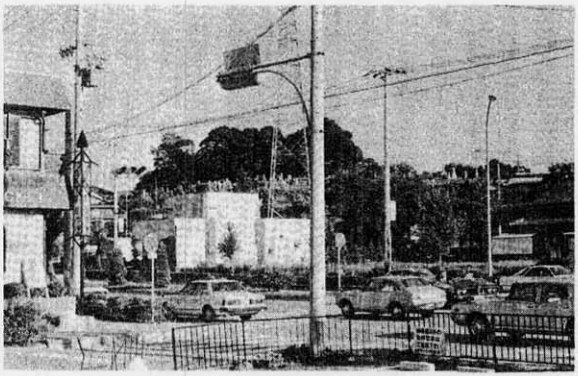
応仁元年（一四六七年）松平から南進策を推し進めていた松平軍へめがけ、西加茂周辺の土豪たちの連合軍が攻め入った。急を聞いた松平四代親忠は、五百騎の兵をもって井田野でこれを討ち破り、後に、数多くの戦死者を手厚く葬って塚を作ったという。これが千人塚である。

しかしその後も、この井田野を舞台に更に三度も戦いが繰り返された。中でも最も激戦だったのが明応二年（一四九三年）十月の戦いである。加茂の三宅・挙母の中条・寺辺の鈴木・八草の那須・上野の阿部らによる四千の連合軍は、青木川方面と大門方面の二手に分かれて攻め入ったので、安祥城主・親忠は、千騎を率いて井田野で迎え討った。三後彦三郎らの活躍でこれに勝った親忠は、以後、父信光以来の南進政策を反省し、北方の守りを固める為に、大給と滝脇に長男乗之・八男乗清を分家させ、更に、寺辺の鈴木氏と婚姻関係を固めることになる。井田野は、いわば松平氏発展途上の転換期とも言える大事な戦いを見つめてきたわけである。

今、千人塚から周りを見渡せば、夏の陽射しを浴びて大門の青田と矢作川の堤がはるかに望まれる。しかし、その間を埋めるものは、高層マンション・国道二四八号線・住宅・ユニチカの大煙突である。井田野の戦いの面影はどこにも見られない。

「夏草やつはものどもが夢のあと」この西光寺境内の句碑に、こう刻まれていた。

（井田小　石川守彦）



パリでカンツォーネ？

太田　裕子

パリ第一夜。パリの空の下を美しく流れるセーヌ川を豪華な夕食を賞味しながらバトー・ムッシュ号で遊覧。ハープの生演奏を聴きながら、次々に出てくる料理をちょっとすましていただく。河岸にはエッフェル塔・ルーブル美術館・ノートルダム寺院等が明るく照らし出され、一層リッチな気分を味わわせてくれる。

そして、この旅行中に起きた数々の失敗談に花をさかせていた頃、ハープにかわってアコーデオンの流しが登場。シャンソンあり、日本の歌あり。いかにも日本人観光客の多いパリらしい。

ところが、しばらくして別の一角から拍手が起きた。恰幅のよい外人客が、アコーデオンを伴奏に歌うところである。歌が始まって驚いた。なんともすばらしい「オーソレミヨ」である。船中はシーン。終わると同時にわれんばかりの大拍手。アンコールの声に答えて、彼はもう一曲「サンタルチア」を歌ってくれた。

まさかパリで、それもこんなすばらしいカンツォーネが聴けるなんて!!観光シーズンならではの、思いもかけぬ素敵なでき事だった。

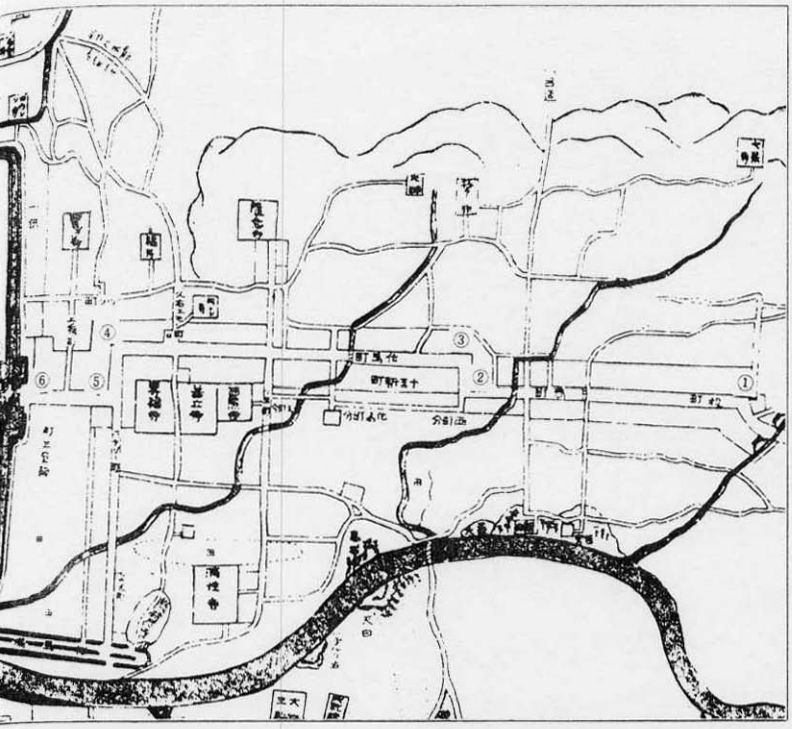
（城南小）

った。なかばあきらめかけていると、三か月ほどたった頃、ひょこんと届いた。白黒、キャビネ版で十二枚であった。

（矢作東小）

㉛

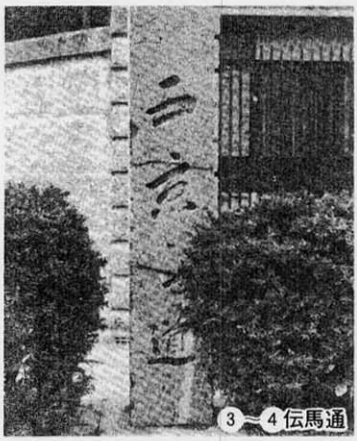
岡崎城下二十七曲り



名に負ふ大屋川を渡る、大橋小橋あり、輿舁く者大平川と云ふは、大平の立場に近ければなるべし、又男川とも云ふ由、……

山を左にして行けば石碑立てり、自是西岡崎領と書く、遙に向ひを見れば城樓あり、鴟吻など幽に見渡さる。是れ岡崎の城なり、まこと岡崎の城は本多中務大輔の城にして、其賑駿府に次ぐべし、町数五十四町二十七曲ありとぞ、城主の家士出迎へて輿の先左右に立つ、其先には市人二人鐵棒を引きて町々を警む。（享和元年　太田南畝の改元紀行より）

1 若宮町


3～4 伝馬通

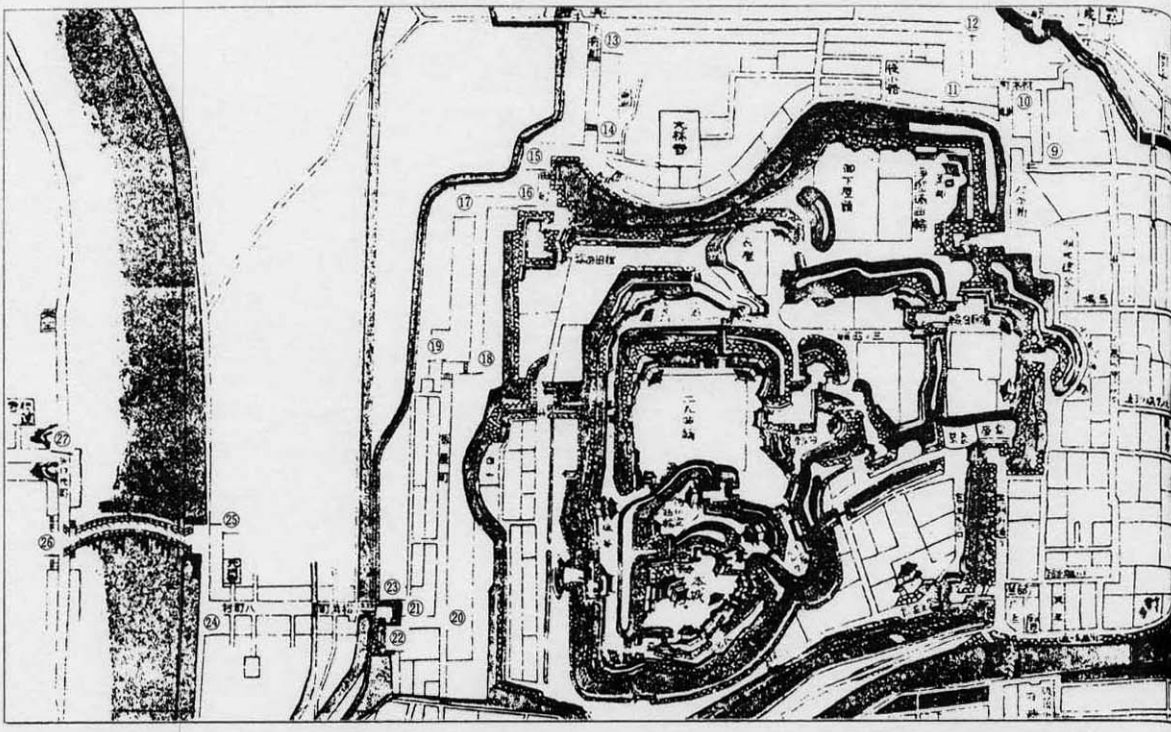
天正十八年岡崎城主田中吉政は城下の東海道を二十七曲りにし防備を図った。

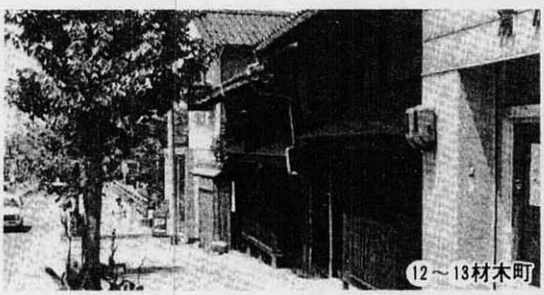
しかし、時代の流れとともに岡崎城下は変化を続け、とくに戦後の激しい変貌によって、遺跡や遺物も急速にその姿を変え、喪失しつつある。

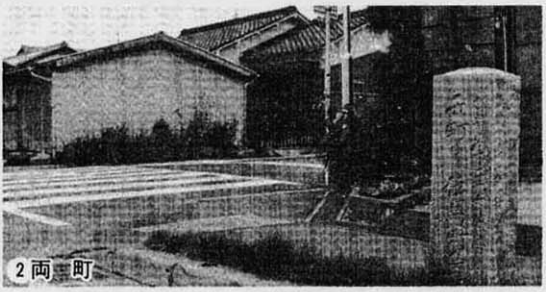
昭和五十五年三月、岡崎中央ライオンズクラブは「旧岡崎城下東海道二十七曲の標識建立」を計画し、本年三月までに、十か所に標識（鈴木其弘氏設計）を建立した。今後も市民の協力を得て、史跡の発掘を続けると言う。

6 康生通

24 八帖町

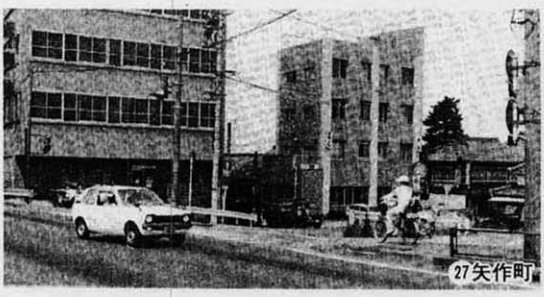



12～13材木町


2 両替町

20～21八帖町

5 篭田町


27矢作町

7 本町

教育日々

がんばるぞ

本宿小　足立　恵子

「どうしてぼくたちだけここにいるの？　何をするの？」と男の子の声。「やだなあ、はずかしいなあ」とこれは六年生の女の子の声。女の子たちはもう気がついているらしい。今、保健室に集まっている子たちは本宿小の肥満傾向児童十三人である。通りすがりの友達に見られては女の子としては恥ずかしいことであろう。

最近は栄養がゆきとどいているのか、子供たちの遊び場が減ったのか、また体を動かすことがきらいな子が増えたのか、まるまると肥えた子をよく見かけるようになった。本校も御多分にもれず、りっぱな肥満傾向児童が十三人もいたという訳である。前々から気にはなっていたが、私の力不足で毎月の体重測定時には少しアドバイスするだけに終わっていた。しかし今年度の東ブロックの研究主題が「肥満傾向児童に対する個別指導」に決まり実践することになった。内心「ほっ」としたことはいうまでもない。手始めに食生活や運動についてのアンケートをとった。やはりよく食べている。間食が多い。チョコレート・アイスクリーム・ラーメン等である。その上、三度の食事をとっているのだからたまらない。また運動も少々苦手のようである。

夏休みに入る前にみんなを集めて食事・間食について話しをした。この子たちの今までの夏休みの様子を調べてみると二～四キロぐらいは太っている。とにかく休み中は間食をできるだけとらないようにと話し、『夏休みがんばりカード』を手渡した。「さて夏休みの結果は？」とみてみると、減っている子はひとりもいない。けれど増えても二・五キロまで、あるいは変わらないという具合で、まずまずとみてもよさそうである。

太っていると変に暗くなったり、性格がいこじになったりするといわれるが、幸いにしてこの子たちにはそんなところは見あたらない。屈託のない笑顔をいつも投げかけてくれるのである。家庭における食生活の改善をお願いしながら、二学期からはこの子たちと一緒に走ることになる。さあ、がんばるぞ。

全国大会に参加して

岩津中　佐伯　友之

「大阪長居競技場はすごく暑いよ。」

全日本の砲丸投げで活躍している高校教師の言葉を思い出した。

ボーイスカウトを先頭に58名の吹奏楽部員、各県選手団と入場行進は続く。開会式後、グランドに陣取った吹奏楽部員によるアトラクションに正面スタンドから驚きの声があがる。

本校陸上部は全国大会への出場は三度目である。本年度は男子三千Mと女子一年百Mの二名の選手を送った。

「先生、アップが終ってマッサージに入ります。」

M男の声は少し緊張していた。やはり緊張するなと言っても無理なようだ。四年前、私は国立競技場で燃えた。そのために生徒はより一層緊張し失敗した。その後の私は常に冷静に見つめ、精神状態も含めたコンディション作りに十分注意した。

ピストルの音と同時にM男は先頭集団に位置し予定どおりのスタートをきった。

「よし！その調子で行け！」

私の声に答えるかのようにM男は最後の一周まで三位に位置し積極的にレースを展開した。しかし先頭集団を形成している選手の数は多く、M男は最後のスパートで決勝に進出できなかった。帰って来たM男はくやしさのため泣いていた。

「勝負はきびしいものだ。くやしかったら泣け！そのくやしさを覚えておけ！」

全力を尽くしてそれでもなお泣いているM男の正直な心に、私も涙が浮んできた。去年の駅伝で三連勝を逃した時、六区を走ったT男が謝りに来た。

「先生、ごめんなさい。」

私はT男をどう慰めたのだろう。きっと今と同じ気持ちではなかっただろうか。

中学生とはわからないもので、二組に出場した熊本県の選手は全国ランキング一位の記録を持ちながら予選落ちしてしまった。調整ミスであろう。

「遠くから来て再び帰っていく選手。ある子は喜び、ある子は悔しさに泣きながら帰る。人生は長いのだ。そして君たちはまだ中学生なのだ。今の頑張りを続けていこうじゃあないか。」

競技場では十八年ぶりに故郷の恩師と偶然再会することができた。励みがまた一つ増えた。

おしらせ

中学校生徒代表アメリカへ親善使節

三浦君(美川中)浅井さん(葵中)中野渡さん(南中)

次のような主旨により今年は外国親善使節団として三人の中学生が選ばれ、アメリカ西海岸都市を中心に学校訪問をすることになった。

◆　国際化の時代を迎え、未来の岡崎を背負う中学校生徒に大きな夢と希望を持たせ、国際的な視野に立って、郷土岡崎の発展に資するため、市内の中学生を海外に派遣する。

◆　郷土岡崎の教育・文化・経済のようすを広く海外に紹介するとともに、外国の風俗・習慣・ものの見方考え方等を理解し、国際的視野に立った豊かな教養を身につけさせる。

◆　本年はアメリカ西海岸都市の学校訪問を通し、岡崎市の児童、生徒との交流の場を開拓し、ひいては都市交流、文化交流の礎とする。

使節団は三浦淳一郎君（美川中三年）浅井千加子さん（葵中三年）中野渡由美子さん（南中三年）の一行で、サンフランシスコ、ロサンゼルス市内の学校を訪問し交歓会や意見交換などを通じて親善交流を深めることになっている。

尚、付添い教員として、稲垣博教諭（城北中）が同行する。

主な日程は次のとおり。

十月十五日（木）東京発
十六日　サンフランシスコ
十八日
十九日　ロサンゼルス
二十日
二十一日　サンディエゴ
二十二日　ロサンゼルス
二十三日
十月二十四日（土）東京着

■全日本第三位…竜海中バレー

去る八月十九日より行われた第十一回全日本バレーボール中学生選手権大会において男子の部に出場した竜海中チームは堂々全国第三位の栄冠を獲得した。

■読売教育賞……竜海中

交流学習障害教育の部において読売教育賞、優秀賞を受賞、文部省からも感謝状を受賞した。

■県知事賞……竜美丘小

野鳥の森林保護、ボランティア活動が認められ、県知事賞を受賞した。

■県教育委員会賞……（東海中・河合中）

去る八月八日第十一回愛知県鳥獣保護実績発表会において東海中、河合中の優秀な活動がみとめられそろって県教育委員会賞を受賞した。

■健康優良児童・生徒

九月十日、実施審査の結果次の者が選ばれた。

○小学校の部

岡崎一　六北小　小林孝司
準岡崎一　福岡小　太田裕久
右　同　六中小　都築清志
岡崎一　連尺小　吉田幸代
準岡崎一　竜美丘小　附柴美和
右　同　愛宕小　天野美幸

○中学校の部

岡崎一　竜海中　中口　健
準岡崎一　南　中　神田達哉
右　同　美川中　柴原富輝
岡崎一　常磐中　本多美智恵
準岡崎一　岩津中　都築克代
右　同　六美中　森あゆみ

■NHK全国学校音楽コンクール、西三河地区予選

九月十三日(日)岡崎勤労会館で小学校・中学校それぞれ十六校が参加し、合唱の技を競った。

最優秀校（代表校）六名小学校
右　同　六ツ美北部小学校
右　同　南中学校
右　同　葵中学校
優　秀　校　広幡小学校
右　同　矢作中学校
優　良　校　三島小学校
右　同　碧南・新川中学校

二十日(日)愛知文化講堂で県コンクールが行なわれ、その様子は教育テレビで放映される。

■後期教育実習

十月五日より二週間ないし四週間にわたって後期の教育実習が開始される。受け入れ校と実習生数は次のとおり。

梅園小—愛教大二名、保育短大—一名、岡崎短大三名
根石小—愛教大四名、岡女短大二名、江南女短大一名、自由学院短大一名
男川小—愛教大四名、岡女短大四名
緑丘小—愛教大三名、保育短大一名、名女大一名
連尺小—愛教大六名、名女大一名
広幡小—愛教大五名、岡女短大二名、名女大一名
福岡小—愛教大六名、名女大一名
矢作南小—愛教大一名、江南女短大一名、名女大二名
六ツ美南小—愛教大四名、岡女短大一名
葵中—県立大一名、名短大一名、自由学院短大二名、愛学院大一名、愛知大一名、淑徳大一名、名女短大一名
梅園幼—愛教大三名、金城大一名、名短大一名
広幡幼—名短大五名
矢作幼—中女大三名、自由学院短大一名

【寄贈刊行物・資料等】

◆**新しい教育課程の中での金銭教育のあり方**
岡崎市立岩津小学校
A5版　八五頁

◆**指導員訪問の記録**
昭和五六年度一学期
岡崎市教科指導員の会

◆**私たちの読書**
七月号　岡崎市教務主任会

◆**読書紹介**
岡崎市校務主任会

◆**読書記録**
—三五号—
教えることと学ぶこと
岡崎市立南中学校

阿部城内跡

所在地―岡崎市小針町

三菱自動車岡崎工場正門の交差点より南へ小道を進むと、左手に森がある。ここが小針城址の一隅にある神明社である。

小針城は阿部忠正の居城で、矢作地区の北部一帯を領していた。文明元年（一四六九年）に松平親忠が安祥城主になると、忠正は自分の子を安祥城へやって、親忠に仕えさせた。その後、松平・徳川の重臣として働いている。なお、阿部一族の墓は橋目交差点南東二百メートル程にある願照寺の門前にある。

この神明社の南東、沢田康臣氏の屋敷内に、周囲約十メートル、高さ三メートル余の小針城の砦の一かくと思われる小山が残っている。城の物見台か、土塀の一部とも言われている。この山の樹木を伐採すると、たたりがあり、病の床に臥すと伝えられている。

城跡南側中央入口附近に阿部氏発祥を記念する「阿部城内跡」と刻名された石碑が建っている。

現在の小針の集落一帯は当時の城内にあり、今日、小針町字城跡〇〇番地という地名が残っている。

●カット　城北中　小林彰一

この本を

○石榴抄	結城　信一	
新潮社		1,200円
○わが夫・新田次郎	藤原　てい	
新漸社		980円
○フランスの親子・日本の親子	有地　亨	
日本放送出版協会		700円
○新しい教育と文化の探求	河合　隼雄	
創元社		980円
○結び目の謎	額田　厳	
中央公論社　中公新書		380円
○みちのくの人形たち	深沢　七郎	
中央公論社		980円
○暴力・非行は対話では防げぬ	小野　沢美	
日経通信社		1,200円
○わたしの絵本論	松井　直	
国土社		1,200円
○生々流転	高橋　義孝	
TBS　ブリタニカ		1,100円
○野ぶどうを摘む	中沢　けい	
講談社		880円

オアシス

岡崎城下二十七曲りの記事取材。残暑厳しい八月十九日、大平一里塚より「本多中務大輔家時代」の地図を手にスタート。わらじ掛けの旅姿ではなかったが、松並木、町屋、家並み等、当時を偲びながら進む。篭田総門附近にて一服。タイムカプセルで心は江戸時代を彷徨。岡崎再見、再考のひとき。

「新鮮味を」という希望が百号特集の中に寄せられていた。「それでは」と力んだものの名案はなかなか浮かんでこない。新鮮なとらえ方や発想は学びとろうとする日々の生活の連続の中から育つという。子どもの中にはいり子どもと共に生活する今、忘れている大切なものではないかと自戒する。

秋晴れの下、運動会の練習たけなわのこの頃、子供ばかりでなく大人たちもスポーツを楽しむ時代になったが、何といっても運動会の醍醐味は帽子取りに網引きらしい。

日頃、見かけない親父連中が、目を細めて声援を送りながら、昔日を偲んで感慨ひとしおというところか。

スカイライン、スカイラウンジ、スカイスクレイパー……

人間は「横」から「縦」の空間を征服しはじめ、宇宙へと歩みを続ける。

しかし、未踏の聖域が少なくなるにつれて「夢の世界」が縮少するのも人類の宿命なのか。

名月や　池をめぐりて　夜もすがら